

すべて体あたり眩しく

河野裕子さんを悼む

河野裕子さんが亡くなつた。仕事先に向かうモノレールの駅で、携帯電話で知らせを聞いた私は、その場にしゃがみ込んでしまつた。つい先日、彼女の住む京都を訪れ、「裕子さんの病状はどうなんだろう」と同行の知人と話したばかりだった。

彼女は私より1歳上の昭和21年生まれ。初めてお会いしたのは、30代になってからだが、彼女のことは20代前半のごく若い頃から知つていた。たまに、短歌に関心を持ちながら学園闘争期の大学に身を置いていた私は、当時は短歌どころではなく、書店の店頭で、短歌

河野裕子さん

雑誌をめぐり、大学3年で角川短歌賞を受賞し、「今刈りし朝草のやうな匂ひして寄り来しときに乳房とがりぬき」といった瑞々しい作品を発表し続けていた彼女を遥かに憧れとして仰ぎ見ていた。

「女・たんか・女」と称するシンポジウムを企画し、自らパネリストを務めながら、各地を巡る。そんな行動を共にしたのは、彼女も私も30代半ばになつてから。阿木津英さん、先に亡くなつた永井陽子さんらと、「括りにされ、30代女性歌人」と呼ばれ、俵万智さん登場に至る今の女

振るまいも、すべてが一体あたり」だったと今となっては感じる。言葉を変えれば、スリートレーラーな激情の人であり、シンポジウム前日の深夜に電話がかかり「明日、何しゃべるんか教えて。私まだ、考え、まだまれへんから」と長電話をするような人でもあつた。友人として、全面的に受益できるタイプではなかつたが、〈胎児つつむ囊となりきり眼るとき雨夜のめぐり海のごとしも〉と、身妊娠を歌い、「君を打ち子を打ち焼ける」ととき掌よざんさんばらんと髪とき眼ると、夫や子を

さんにとっては、合わねえ  
もう一枚あるかのよう  
きかった。「私、歌つく  
ら、まず永田にみせて、  
○印をつけたのを出すの  
腹面もなく、そう語る彼  
つたし、それを大切にして  
るかのごとき永田さんの  
ある態度だった。

河野さんが乳がん手  
し、その後、再発したと  
たとき、仕事で一緒にいた  
永田さんに「裕子さんは  
う」と聞くと「死んだら  
だ。絶対死ぬな。死んだら  
られるぞとつねに言つ  
る」と彼は答えた。そのと

鏡に大うた。彼が娘の紅さんを含めた歌人一家としての仕事を広げていた。肉体は滅びても残した歌は減びない。それをいちばんよく知っていたのは裕子さん本人であり、永田さん一家であろう。彼女は、死の直前まで口述筆記で歌をつくっていたという。どんな歌を置いて、早々とこの世を去つていったのか。辞世を読むのは少し怖い気がしないでもない。

性短歌隆盛の先駆けとなつたといわれた。振り返れば、なつかしい日々のことである。

歌う彼女は夫を子をり身の私にどつては、眩しうる対象であつた。

何と厳しい言葉……と思つた

彼女の著書に『体あたり現代短歌』という評論集があるが、河野さんの歌も生き方も振るまいも、すべてが「体あたり」だったと今となつては感じる。言葉をえれば、ストレートな激情の人であり、シンポジウム前日の深夜に電話がかかり「明日、何しやべるんか教えて。私まだ、考え、まとまれへんから」と長話をするような人でもあった。友人として、金面的に受容できるタイプではなかつたが、「胎児つづむ囊」となりきり眠るとき雨夜のめぐり海のごしも」と、身妊娠を歌い、「君を打ち子を打ち灼けるごとき掌よさんさんばらんと髪とき眠る」と、夫や子を

ここに学生時代に歌を通じて知り合い、結婚した夫君、永田和宏さんの存在は、河野さんにとっては、合わせ鏡のもう一枚であるかのように大きかった。「私、歌つくつたら、まず永田にみせて、彼が○印をつけたのを出すの」。臆面もなく、そう語る彼女だつたし、それを大切にしていくかのとき永田さんの余裕ある態度だった。

河野さんが乳がん手術をして、その後、再発したと知ったとき、仕事で一緒になつた永田さんに「裕子さんは、どう」と聞くと「死んだらダメだ。絶対死ぬな。死んだら忘れるぞ」とつねに言っていられた。彼は答えた。そのときは

野さんの生を存分に全うさせようと、永田さんも懸命なのだと思い直した。ここ何年かは、その言葉を体現するかのように、夫婦、息子の淳さん、娘の紅さんを含めた歌人一家としての仕事を広げていた。肉体は滅びても残した歌は滅びない。それをいちばんよく知っていたのは裕子さん本人であり、永田さん一家であろう。彼女は、死の直前まで口述筆記で歌をつづっていた。どう。どんな歌を置いて、早々とこの世を去つていったのか。辞世を読むのは少し怖い気がしないでもない。